

富山市立図書館

図書館だより

第45号
2011.4

ともに創る図書館サービス

音訳ボランティア

図書館で活躍するボランティア

先日の東日本大震災後、被災地ではボランティアが数多く活躍しています。避難所での肉体的な作業だけではなく、例えば相手の話をただ静かに聞くという傾聴ボランティアなども、被災された方のストレスを和らげるのに一役買っています。

このようにボランティアの活動は、私たちの生活の場において身近なものになっています。

図書館においても、ボランティアの活動分野があります。現在、当館で活動しているボランティアには、「音訳ボランティア」と「読み聞かせボランティア」があります。

今回は、音訳ボランティアについてご紹介します。

音訳とは？

「音訳」とは、弱視や全盲といった視覚による情報取得が困難な方々へ、元の文字資料を、聞きとりやすい音声で正確に伝えることです。感情を込めたり、声色を使う「朗読」とは異なります。視覚障害のある方にとって目の代わりとなる音訳は、目で字を追うという行為と同じであるということになります。

実際の音訳の作業は、資料の正確な読み方や、発音を調査するところから始まります。漢字の熟語の大半は音の組合せで読みますが、中には、「相場」のように前の字を音、後を訓で読む「重箱読み」や、

逆に、「野宿」のように訓から音と読む「湯桶読み^{ゆとう}」があります。対面朗読を長く利用されている二村晃氏は著書『耳で読む読書の世界』（東方出版 2010）で、このような熟語はつい思い込みで誤読をされることが多いと指摘しています。

また、地名や人名などの固有名詞は、音訳の際に、想像する以上に細部の確認が必要となります。例えば、「日本」の読み方は、固有名詞の「北日本放送」では「キタニホン」と読みますが、「北日本新聞」は「キタニッポン」と読みます。地名では、「岩瀬」は、富山弁では上にあがる発音で読みますが、標準語では下にさがります。このようなアクセントの問題も、実際の音訳の際には悩ましい点になります。

収録後には、録音された音声が入りの資料を正しく反映しているか一字一句確認する「校正」という作業があります。一つの作品に対して、二人の校正者が担当し、校正の精度を高めています。



当館スタジオでの音訳収録作業風景

音訳には、録音技術、音訳表現技術、校正技術が必要になります。録音技術は、鼻息や息継ぎの音など雑音を入れずに録音する技術のことです。それでも、お腹のなる音や、外にいるセミの音が混ざるなど、雑音のない録音は案外難しいものです。

音訳表現技術は、文意を理解し、強調して読む語を判断して表現する技術のことです。例えば「私はあなたと遊園地に行きたい」という文章の場合、「あなた」と「遊園地」のどちらを強調するかで、話し手の意図する心情は全く変わってきます。好意を寄せる「あなた」とだから遊園地に行きたいのか、それとも「遊園地」に行きたい気持ち強いのか。前後の文から推測して適切な語を強調することで、より正確に内容を伝えることができますといえます。

音訳ボランティアと図書館

このように特殊な技術を要する「音訳」を行うのが音訳ボランティアです。その一員になるには、技術を身につけるための講座を、約1年間受講する必要があります。前期は、富山市社会福祉協議会で初級講座を、後期は当館で中級講座を開講しています。

講座では、現役の音訳ボランティアが講師を担当し、音訳の初歩から実践までを学びます。資料を下読みする際に、言葉の読み方の調査方法を参考図書室で学んだり、受講生が実際に録音したものを聞いて互いに検討したりしています。音訳に必要な、資料を読む力と、音訳されたものを聞く力を養います。



録音図書に装備する
点字シールの作成



完成した録音図書の確認作業

録音図書の今とこれから

録音図書を取りまく環境は、近年大きく変化してきました。その一つは、カセットテープ録音図書から、CD-Rを使ったデジタル録音図書が主流になりつつあることです。

デジタル録音図書は1枚に長時間収録ができる、好きな箇所の頭出しができるなどの利点があります。視覚障害のある方にとって、カセットテープ録音図書を再生機から取り出したり、聞きたい箇所を再生することは大変煩雑でした。デジタル録音図書では、希望する段落からの再生が、ボタンを押すだけの簡単な操作でできます。再生には専用の機器を用いますが、これは、マルチメディア資料の国際標準規格「DAISY」を利用して特殊な編集がされているためです。



デジタル録音図書（右）と再生機（左）

デジタル録音図書では、そのデータをインターネット上で配信するサービスも行われています。音楽のデータ配信と同じように、携帯型の専用再生機にデータを取り込むことで、いつでも好きな場所でデジタル録音図書を聞くことができます。

当館では、デジタル録音図書のデータ配信サービスはまだ行っていませんが、これからの課題になると考えています。

また、平成22年1月の著作権法の一部改正に伴い、公共図書館でも、図書の著作権者の許諾なしに録音図書を製作することができるようになりました。当館では、地域に密着した独自の資料として、例えば郷土に関係する資料や、視覚障害のある児童・生徒に利用されるような図書の音訳を考えています。これからも音訳ボランティアとの長年の信頼関係を基盤に、より時代に即した図書館サービスの提供を目指します。（本館 沖）

レファレンスあれこれ

Q. 陸軍士官学校の寮歌がどのようなものであったか知りたい。

寮歌とは、旧制の大学や高等学校などの寄宿寮で生活する学生が、それぞれの寮でうたうために作られた歌である。

まず、富山市立図書館の所蔵資料の中から、「寮歌」をキーワードに資料を調査する。寮歌関係の本は何冊かあるが、質問者は歌詞を知りたいようであったため、『日本寮歌集』（日本寮歌振興会 1991）と、『日本校歌・寮歌集』（新興楽譜出版社 1973）を確認してみる。

『日本寮歌集』には日本全国の旧制高等学校の校歌・寮歌が譜面付きで掲載されており、中には複数の寮歌を持つ学校もあったが、陸軍士官学校については校歌しか載っておらず、寮歌の記述はなかった。

次に「軍歌」をキーワードに資料を探し、『日本軍歌集 決定版』（新興楽譜出版社 1970）と『軍歌と戦時歌謡集』（新興楽譜出版社 1971）を見てみたところ、陸軍士官学校校歌や陸士作の歌、陸軍関係の歌が多数掲載されていたが、寮歌は載っていなかった。

これらの資料にも載っていないということは、陸軍士官学校には寮歌が存在しないのではないかと考えられるが、もう少し調査を続けてみる。

今度は陸軍士官学校寮歌の存在の有無についても確認できないものかと、「陸軍」をキーワードに資料を探してみる。その中で『陸軍士官学校』（秋元書房 1969）の「軍歌・雄叫集」という項目に、第一高等学校をはじめとする明治 30 年代の寮歌確立の流れを背景に、陸士予科も毎年新しい歌を作って記念集会で歌う伝統があったことについて書かれていた。その歌の多くは当時の高校寮歌の曲を借り、陸士が詞を乗せたものであったらしい。

それらが陸軍の「雄叫」として広まり、珠玉の何篇かが広く陸軍全体の中に浸透して愛唱歌、軍歌となっていったとのことであった。

これらの記述によると、陸軍士官学校においては、寮歌として定められている歌はないものの、陸士作の「雄叫」が寮歌に近いものだと考えられる。

また、インターネットで「陸軍士官学校」「寮歌」をキーワードに情報を探すと、「日本寮歌祭」という言葉が出てきた。日本寮歌祭の公式サイトはなかったが、寮歌祭参加者が更新している多数の個人のサイトと、寮歌祭の実況 DVD『第五十回日本寮歌祭 国を憶うて寮歌を謳う DVD 完全収録版』（コアラブックス 2010）の販売情報から、日本寮歌祭には旧制高等学校卒業生の他に陸軍士官学校卒業生も参加していることや、日本寮歌祭が 2010 年の第 50 回をもって終了したという情報が得られた。

当館では『日本寮歌祭四十年史』（国書刊行会 2000）を所蔵していたので、内容を確認してみたところ、陸軍士官学校のページに「寮歌祭であるから、校歌でなく我々の寮歌にあたる『雄叫編』を歌おうという声も陸士内に強くあった」と書かれていた。

寮歌祭で陸軍士官学校卒業生が歌っているのは校歌であるようで、その裏話として、「雄叫」が曲の多くを高校の寮歌から拝借しているため、本家の高校の前で歌うには気恥ずかしく感じる、というものもあった。

以上の調査結果から、陸軍士官学校校歌と雄叫のいくつかが譜面付きで載っている『陸軍士官学校』を質問者に見てもらった。（本館 新保）

メールでのレファレンス受付を開始

平成 23 年 4 月 1 日より、図書館への調査相談をメールでもお受けしています。

詳しくは、当館ホームページの「お問合せ」をご覧ください。